

今年は全国でクマの出没が相次ぎました。高温やドングリ不作、植生の変化など、自然の揺らぎが動物の行動に表れていると言われています。先日の三宅管内校長会でも、来月に内地でスキー実習に向かう中学校が、現地のクマ情報を旅館と共有しながら安全に備えるという話題が出ました。三宅島にクマはいませんが、子供たちを守る「安全アンテナ」は、どこにいても高く掲げ続けておく必要があると感じました。

一方で、自然の変化は三宅島にも静かに届いています。海水温の変動による魚種の移り変わり、鳥の渡りのずれなど、生態のリズムは揺らいでいます。また、かつてネズミ対策として持ち込まれたイタチが今も三宅島の風景に溶け込み、その存在からは、人と動物の関係が時代とともに変化してきた足跡が見えてきます。一方で、イタチやカラスは農家の方々を悩ませる存在でもあります。島では小さな変化が大きく響きます。それは単なる「いたちごっこ」ではなく、自然が確かに動いている証なのかもしれません。

そして三宅島ならではの生き物といえば、梅雨の頃に道路の真ん中に悠然と鎮座する大きなカエルたちの姿です。雨上がりの夕暮れ、退勤して帰る道すがら、道路の真ん中で遠くを見つめながら佇むその姿に、驚きと微笑ましさが混ざり合う、そんな三宅島らしい風景に出会います。赴任当初、ワイパー越しに見えたあの自信に満ちたポーズ、そして鍛えられた大胸筋と大腿四頭筋には、思わずたじろいだものでした。

そんなことを考えていたある日、校舎に歌声がふわりと流れてきました。



♪こぎつね こんこん やまのなか～♪

音楽室をのぞくと、先生と一緒に2年生が歌の中でまだ見ぬ動物たちと出会い、声を重ねて世界を広げていました。キツネの息づかいや、季節の流れを感じ取ろうとする姿は、まるで音楽室が小さな森に姿を変えたかのようでした。歌の力で、島では見ることのない動物にもそっと心を寄せることができます。そのことにあらためて気付かされます。

国語の物語の中にも動物たちは寄り添っています。『ごんぎつね』の切なさ、『スイミー』の仲間を思う心、『白いぼうし』の不思議な蝶、『おおきなかぶ』に見る協力の力。昔話では『うさぎとかめ』の学び、『桃太郎』の犬・猿・キジ、『金太郎』と山の動物たち、『さるかに合戦』に描かれる弱き者へのまなざし、動物の姿を通して人間の心のあり方が描かれています。動物は、人の心を映す大切な鏡なのだと感じます。

クマのニュース、三宅島の環境のゆらぎ、イタチやカエルの姿、そして音楽室の歌声。これらは一見別々の出来事のようでいて、実は一本の線でつながっているように思います。動物の姿を通して自然を感じ、自然を通して自分たちの生き方を見つめ直す。そこに、「人間と動物はどのように共に生きるのか」という静かな問いが立ち上がってきます。

自然と人間は、本来対立するものではありません。しかし、自然の変化は私たちの生活に大きな影響を与え、同時に私たちも自然に影響を及ぼしています。だからこそ、AIなど現代のテクノロジーが加速度的に進化する今の時代に、いったん歩みを止め、自然との向き合い方を振りかえる。そして、考えてみることが必要なのだと思います。

冬の風が校庭を渡る季節。島の自然に耳を澄ませながら、子供たちが生き物と共に歩む未来を、丁寧に、そして根気よく育んでいきたいと思います。